

被服教育における「個性を生かす着用」の指導に関する一考察

天木 桂子

(岩手大学教育学部)

Introduction to Guidelines of "Dressing for Showing Your Individuality" on Clothing Education

Keiko AMAKI

Faculty of Education, IWATE University

1. はじめに

平成10年12月に文部省から出された中学校学習指導要領の改定により、「技術・家庭」の家庭分野は、A生活の自立と衣食住とB家族と家庭生活の2つとなった。うち、A生活の自立と衣食住の内容の一つである「衣服の選択と手入れ」では、指導事項として「衣服と社会生活とのかかわりを考え、目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できること」とあり、保健衛生的な着方を中心として行ってきたこれまでの指導から、個性重視の指導への転換を考えなくてはならない状況となっている。これ以前に示された学習指導要領でも、着用、着方に関する内容はあったが、「活動にふさわしい着方」や「時、場所、目的にあった外出着の着装」、「中学生らしい着用」などのように、いわゆる常識や一般論で語られる範囲の内容にすぎなかった。さらに、平成元年の学習指導要領に基づく指導書では「個性的な着用の指導」の文言があるもの、教科書での取り扱いもわずかで、それほど重視されていないことは明らかであった。

今回の指導要領改定が実施される平成14年度からの教科書では、「個性を生かす着用」に関する記述がこれまでより大幅に増え、しかも「自分らしく」「似合う」「流行」「コーディネート」などの新しい概念がキーワードとして登場している。このことは、これまでの被服教育における着装教育の中心が「身体

的快適さ」を目指すものであったのに対し、今後はこれに加えて「心理的快適さ」の概念を取り入れ、衣服を着用することを個人にかかわる事柄ととらえて指導する方向に変化しつつあることを示している。

本論文は、これらをふまえ、大学生に着装教育についての考えや意見、これまでの学習経験などを調査し、その結果を参考にしながら「個性を生かす着用」の指導にあたって現場でどう取り組むべきか、どのような点をふまえるべきかについて、筆者の考えを示すものである。(なお、「身体的快適さ」および「心理的快適さ」は、筆者の命名による。)

2. 着装教育に関する調査

2.1 調査時期および対象者

2000年12月から2002年2月にかけて岩手大学教育学部小学校および中学校教員養成課程の2-4年次学生90名に対し、以下に示す質問1を自由記述させた。回収数は86名である。この学生たちの約半数は回答時点で小学校または中学校で3-4週間の教育実習を経験している。さらに岩手大学教育学部中学校教員養成課程家政教育講座の3-4年次学生49名に対し、以下に示す質問2を自由記述させた。回収数は49名である。この学生たちは回答時点で全員教育実習を経験している。

2.2 調査内容

内容は、学校現場で着装教育、特に似合う衣服や好きな衣服といった個人差のある事柄を題材として取り扱うことに対する考え方、また、これまで自身

(受付 2002年3月28日 / 審査終了 2002年4月4日)

〒020-8550 盛岡市上田 3-18-33

が小、中、高等学校を通じて学習してきた着装教育の内容についてである。2つの質問を以下に示す。

(質問1) 小学校や中学校の被服教育で好きな衣服、似合う衣服といった個人の好みを取り扱うことについてどう考えるか述べなさい。

(質問2) 学校でこの題材を取り上げる場合、どのような取り上げ方をしてどこまで学習させるべきだと思いますか、また何を学んで、何を身につけてほしいと思いますか。さらに、あなた自身はこれまでどんなことを学んできましたか。それは満足するものでしたか、について述べなさい。

2.3 分析

得られた回答をもとに、大学生が考える「着装」に関する考え方、興味を程度を探った。また、ある意味極めて内面的で個人差のある事柄について学校の題材として扱うことに対する考え方を、必要性、実現の可能性といった視点から読み取った。

3. 結果および考察

3.1 快適な着装とは

ヒトが衣服を身につける目的、機能にはいろいろある。最も基本的なこととして挙げられるのが「保健衛生上の機能」と呼ばれるものである。これは気候、気温、湿度、天気といったまわりの温熱環境から身を守るために衣服を着用することで、簡単に言うと、寒いときには暖かく、暑いときには涼しく、日差しが強いときは日光を避けるように着こなすことである。また、「生活活動上の機能」と呼ばれるものは、作業や運動をしやすくしたり、さまざまな危険から身体を守るために着用することで、動作を妨げず動きやすくしたり、時には記録を向上させるために身につけるスポーツウエア、各種作業着、熱から身を守る消防服、けがや寒さに備えた登山服などが挙げられる。

一方、「社会生活上の機能」と呼ばれるものは、社交、儀礼、標識として重要な役割をもつもので、社会生活の場においてその場にふさわしく人との交わりを円滑にするためや、警察官の制服に代表されるようにその人の所属が他の人にわかることを目的とした着用である。学校の制服もこれに当てはまる。さらに「装身上の機能」と呼ばれるものがあり、身

体を着飾り、個性や美意識を表現するため、自身を効果的に演出するために衣服を着用することである。

これらの機能は、すべて「快適さを得る」ことを目的としている点で一致する。しかし、その快適さの対象は、前者の「保健衛生上、生活活動上の機能」は「身体的快適さ」であり、後者の「社会生活上、装身上の機能」は「心理的快適さ」で、2つに大別されると考えてよい。すなわち、衣服の着用には必ず「身体的快適さ」と「心理的快適さ」の両方が同時に関わっており、個々の場面の状況によってどちらを優先させるべきかを常に着用者自身が考える必要がある。従って、常に快適な着用を意識しながら豊かな衣生活を送るためには、前述したどちらを優先させるべきかを考えたり、よりふさわしい判断ができる能力を身につけていなくてはならないと言えよう。

3.2 被服教育における着方、着用の指導

小学校から高等学校にかけて、これまで家庭科関連科目で取り扱われてきた着方の指導は、「身体的快適さ」を目的とした内容が主であったと言って差し支えない。寒いときの暖かい着方や運動で汗をかけたあとの着替えの必要性などは、一般的な答えがすでにあり、ほぼすべての人に同等にあてはまる。こうした内容は、たとえば算数で「1たす1は2です」というのと同様で、到達目標がはっきりしているため1クラス30-40名の児童生徒に対して教える場合もある程度扱いやすく、教師としても取り上げやすい。

しかし、「心理的快適さ」について取り扱う場合はある程度の難しさが伴う。それでも「社会生活上の機能」に関しては、衣服が所属や職業をあらわしたり、行事などによって衣服や着方のきまりがあること、それぞれの場にふさわしい着方があることなど、いわゆる社会常識（あくまで日本など自分たちが生活している地域における常識であるが）が確立されているため答えが限られており、指導しやすい内容と言えるであろう。残るのは「装身」を目的とした着方である。冒頭に書いたように、平成14年度から実施される中学校の学習指導要領では「個性を生かす着用」が明記されており、これまで以上に教科書でも大きく取り扱われていることから、今後

はその指導に真剣に取り組まなければならないのは必至である。

「装身」の概念は非常に多種多様で、しかも人によって大きく異なるため、多数数の児童生徒に対し同じ教室で指導するにはかなりの困難を伴うと予想される。また、その人にとって「似合うー似合わない」も大切であるが、たとえ似合うと言われた服でも、本人が気に入らなければ着用に至らない。これは、学校現場に「好きかー嫌いか」という個人に依存する判断基準を持ち込むもので、これまではほとんどの場合で「よいかーわるいか」の道徳的、社会的基準で判断してきた学校にとっては非常に異質であり、ある意味画期的といえるものである。さらに、多くの中学校には指定された制服があり、クラスメートや友人たちとは自分と同じ制服を着ている姿でほぼ毎日接しているのが現状である。全員が同じ服を着ているクラス内で、「個性を生かす着用」と言われても現実感がなくピンと来ないのが通常の状態ではないか。さらに、毎年のように変化する「流行」についても無視できない。ミニスカートが流行しているときに「あなたにはロングスカートが似合う」と言われてもやはり着用をためらう。流行を考えると、今年指導した内容が来年も同じように使えるとは限らず、その年々の社会の情勢を見極めながらの展開が常に必要になる。

以上のように「装身」について題材として取り扱うには、どこを落とし所として授業を展開するかを考えるだけでもかなり困難が予想され、同時にこれまで以上に教師の力量が必要とされる部分だと言える。

3.3 大学生が着装教育に求めているもの（質問1より）

ここで、大学生のアンケートからいくつか意見を挙げる。

質問1に関して、学校で好きな衣服、似合う衣服について取り扱うことに対し、肯定的な答えだったのは52名（60.5%）、否定的な答えだったのは30名（34.9%）、特に肯定も否定もせずどちらでもないと言ったのは4名（4.7%）だった。

肯定的な意見のなかで代表的なのは、「難しいと思うがやるべきだ」というもので、実際に取り扱うには教師としてかなりの困難を伴うことを自覚し

ながらも、「やってみるべきだ、自分も習ってみたかった、やったら楽しいと思う」と述べているものが多い。以下「・」で始まる部分は学生の意見である。一部筆者の判断で省略してある。

- ・大切なことであると思う。小学生にとって衣服はほとんど親から買い与えられるものだが、将来を見越して自分のスタイル、自分らしさを確立することは大切であると思う。
- ・難しいと思うが、好きな服を考えることは自己理解につながるし、なにより服を選ぶのが楽しくなると思う。
- ・好きな衣服を学習することで、自分について知ることができる一つの機会になっていいと思う。
- ・自分に似合うものがわかることによって、自分自身がわかってくると思うのでとてもよい。
- ・自分の好みは自分でよくわかっているはずだけど、他人からこれも似合うよ、と指摘されることによって新しい発見ができるかもしれない。
- ・自分について他人の考えと自分の考えを比べることができればとてもよいと思う。
- ・人に見てもらって、自分の好みと人から見た似合うの違いが学習できておもしろいと思う。

これらの意見は「自分自身の発見につながる」という点から肯定しているものである。「衣服の着用が自己表現の場である」という概念から学習させることによって、自分が何者かという自己発見や自己確立、自己肯定につながる意識を育てる題材だと考えている。また、他人から自分について意見を言うてもらうことで、今まで知らなかった部分を知り、自分を客観的に見る機会を与えるきっかけとして期待しているのが読み取れる。

- ・私は学校で習ってこなかった。しかし、教育の中には個人個人を尊重する、大切にするという動きがあると思うので、ぜひ取り上げたほうがいいと思う。
- ・服装は個性を出せる方法の一つなので教えた方がよい。
- ・好みには個人の個性が表れ、興味も湧き意見を出し合うことで感性も磨かれて個人を認めあうことにつながると思う。

- ・子どもたちはそれぞれ自分の個性を持っており、それが服装に表れるのを否定することはできないと思う。
- ・好みというのは個性を表すことになる。今の学校では個性を出す場が必要だと思うので、被服の好みは必要だと思う。そうでなければみんなと同じことしかできない人間になってしまうのではないだろうか。一番分かりやすい個性の教育は外見のもの、つまり服装から入るべきだと思う。

これらの意見は、「個性」について学習するいい題材だととらえている。好きな衣服や似合う衣服はみんな違うことを知ることで、自分と違う他人を認めるきっかけになると考えている。特に最後の意見は、個性というある意味とらえどころのない概念を自分で表現したり、他人から見ても分かりやすいのは服装であるといっており、内面の個性に比べて学習しやすいと考えているのがわかる。さらに、家庭科だけにとどまらず、衣服の授業をきっかけにして他の教科へも発展でき、内面の個性の学習に発展させていく可能性を期待させる。

- ・自分の好きな服を着ることで、気持ち的にプラス思考になることは実際あるので取り扱っていいと思う。
- ・自分らしさを表現することは大切で、今の若者には少し足りないことだと思うのでやるべきだと思う。
- ・個性を大切にするため、自分自身が他の人とは違うことを表現するためにはとても重要なことだと思う。

これらの意見は、「自己表現」の場の一つとして着用をとらえている。似合う服を着ることで気分がよくなったり、自分らしさを出すことで満足感を得るための手段として衣服の着用が有効だと考えている。また、これをきっかけにして何事にも積極的に取り組んだり、自分の考えをきちんと主張できる生徒たちを育てることにつながる可能性もあり、やはり被服教育だけにとどまらない発展性が期待できる。

以上のように、学習することに肯定的な意見は多

くあったが、そう記述しながらも自分はこういう授業は受けてこなかったという意見がほとんどであった。「やってみたかった」、「もしやったら楽しいと思う」という意見も比較的多く、「似合う衣服を知りたい」という欲求が大学生にもあることを示唆している。これは、今まで学習してきた被服の内容にかならずしも満足していないとも受け取れるが、現在毎日自由な服で通学していることに少なからず苦労している現実も反映していると解釈でき、今でも実際に学習してみたいという考えにつながっていると読み取れる。

3.4 指導の難しさ（質問1より）

一方、否定的な意見も多くあった。代表的なのは、「あまりにも個人差があることを一つの教室で学習するのは無理がある」とするもので、何を教えるのかわからないというものであった。学校教育では、ある程度答えがしぼれる内容でないといけないという意見や、そのような個人的な内容は学校にはふさわしくないとする意見もあった。

具体的な意見を挙げる。

- ・十人十色なことを何十人も一斉に何を教えるのか、とても難しいことだと思う。
- ・個人差が大きすぎるので、一貫して教えるのはいろいろと難しい面もあると思う。

個人差が大きく答えを一つにしぼれない内容を扱うのは、教師の立場として非常に難しいという考えがよく表れている意見である。また、クラスの人数分だけ回答も別々にあるという題材は、一斉授業にはなじまないと感じている。そもそも何を教えていいのかかわからないし、なにより授業がまとまるのかという教師の力量が問われる部分に不安や難しさを感じるのであろう。

- ・衣服の好みなどは学習によって得るものではないと思う。
- ・自分の中で決めていくことなので、わざわざ教えずなくてもよいと思う。
- ・自分の服装について他人からとやかく言われる必要は全くないと思う。
- ・似合うとか好きということは人それぞれなので、

わざわざ学校で取り扱う必要はないと思う。

- ・日々の生活の中で個人の好みはわかることだと思う。それに、他人の好みについて何か言うことは教師にはできないししてはいけないことだと思う。
- ・好みは自分の自由であり、学校で取り扱うことはやめたほうがよい。やっても学校好みの授業になると思う。

これらは、学ぶ生徒側の立場に立った意見で、個人的なことに学校が立ち入ってほしくないとする考えである。自分の服装はある程度プライバシーに関わることであり、公の場で取り扱うことではないと感じている。また、これについては日々の生活の中で自然に身につくことであり、友だちどうしや家族間で話すことはあっても学校には関係ないということであろう。自分とは異なった価値観を指摘され、場合によっては押しつけられることへの批判も感じられる。特に最後の2つの意見は、教師や学校の関わりを明確に否定し拒否している。これは、学生がこれまでの経験をふまえながら、教師、学校に対して持っているイメージが反映されていると考えることもできる。

- ・自分に似あった服のような個人的なことを人の前で取り扱われるのは恥ずかしく、いやな気分になる。
- ・個人個人の感性や考えを表現できていいと思うが、自分に自信のない生徒もいるので少し問題があると思う。

この2つの意見は、個人的なことを他人に知られたくないとするものである。自分について他人が見て、話して、評価することに対する拒否反応である。しかもみんなの前でとなると、そこにはかなり不安がつきまとうと感じている。自分に自信がある人はいいが、そうでない人にとっては居心地の悪い授業になる心配がある。

- ・小学生は親が服を用意してくれるし、中学生は毎日制服を着ているのでやらなくてもいいと思う。
- ・たとえ自分に似合う服や好きな服がわかったとしても、実際にはすべてが自由になるわけではない

ため、どう教えたらいいのかわからない。

- ・学校で学習しても、実際は学習した通りになるとは思えないので必要ないと思う。
- ・私の学校は校則が厳しかったので、そのような学校で好みについて扱うのは難しいと思うし、生徒も先生に対して反感を抱くと思う。
- ・制服を着ているがらの好きな衣服、似合う衣服の授業は難しいと思う。

これらの意見は、そもそもこのような授業は必要ないとするものである。たとえ学んでも実際は好きな被服を着たり選んだりできるわけではなく、日常生活の中で必要性を感じていない。こうした意見が出てくる背景の一つには学校の制服の存在があると考えられる。たとえ似合う服がわかったとしても、制服で過ごすことの多い生徒たちにとってはそれを実践する機会が少ない。また、休日であっても完全に制服から開放されるとは限らない状況がある。

さらに、指定された制服があることで影響を及ぼしているのは、日常の衣服を自分で選ぶ機会がない(なかった)ことである。小学生のうちは親が選んでくれていた、中学生、高校生になったら制服だった、という生活では、そもそも自分の意識の中に似合う服や好きな服という概念が生まれたり育ったりするきっかけを探すのは難しい。学校へ行く朝は何も考えず機械的に制服を着る、ソックスやコート、靴にも制約がある、この他にも校則が厳しくてヘアスタイルの自由もままならない、という状況下ではその日の天候がどうであっても、気分がどうであっても毎日の格好は決まっている。そこには、似合う、好きなどという基準は入り込めず、存在しないと言ってもよい。このあたりが「実際は学習した通りになるとは思えない」という考えにつながっていると推察できる。

これに関連して、最後の意見に「制服を着ているがらの授業は難しいと思う」とあるが、この指摘は教師にとって授業の展開に大きく影響する事柄である。すなわち、「個性を生かす着用」を授業の主題としながら、教室の生徒全員が同じ服装をしたなかでの展開となる。生徒たちにとっても、他のクラスメートがその日ばかりでなく、毎日同じ格好をしている姿しか見ていない、しかも自分自身も毎日ほぼ同じ格好をして生活している。このような状況の中で

「個性」を取り扱うことの難しさは想像に難くない。しかも、内面的な個性ではなく、服装という外面的な一目でわかる部分である。

最も難しいのは、生徒への動機づけではないか。前述したように、学んでも生活の中で生かせないことに加え、皆同じ格好をしている教室内の雰囲気の中でそれとは全く異質な方向、すなわち、「人には似合う服や色がありそれは人によって異なる」と言われても現実感に乏しく想像しにくい。これでは学習への意欲もかき立てられにくく、何のためにこれを学習しているのかの目標が見つけにくいなど、机上の空論に終わる可能性もある。まさか、今は役に立たないが学校を卒業して好きな服が着られる大学生や社会人になったときには役立つから、と初めから言っておくわけではあるまい。また、「個性を生かす着用」を指導しながらも、一方で厳しい校則を強いる教師に対して生徒は矛盾を感じ、時には反発を買う可能性もある、というのはアンケートの意見の通りである。

3.5 学生が考える着装教育（質問2より）

質問2では、家政教育専攻学生に対し、授業で着用、着方を取り上げる際の方法や考え方を聞いた。ほとんどが自身が教師の立場に立って回答している。中には教育実習中に得られた経験に基づいた考えもあった。具体的な意見を挙げる。

- ・この題材を学校で取り上げる場合は、天気、温度、湿度、時間を教師が指定し、生徒にはそれぞれ「身体的快適さ」と「心理的快適さ」を求める状況や場面を考えさせ、なぜそう思うのかも合わせて発表させるのがよいと思う。

これは、自然環境条件を教師が設定し、生徒はいろいろな場面を設定して指定された自然環境下でのふさわしい服装を考えるという具体的な授業提案である。たとえば、教師が設定した「7月、外気温28度、湿度65%、晴、午後1時ごろ」という条件をふまえ、生徒は「野球観戦に行くとき」「デパートに買い物に行くとき」「知人の親の葬儀に行くとき」「就職の面接に行くとき」などの場面を設定してそれぞれにふさわしい服装を考え、その理由も考えながら「快適さ」の概念を学ばせる展開である。

- ・学校で快適な着装を学ばせるのは、視点を絞って学習させないと難しいと思う。快適な着装はさまざまな因子から成り立っていて、それらを一つ一つ学習させることは時間的にできない。私が教育実習で行った授業でもいろいろな資料を出して比較させたが、生徒はあまりたくさん資料を取り入れても一つの視点でしか考えることができなかった。

授業のゴールを快適な着装と決めていても、それを得るにはさまざまな視点から考えなければならぬ。しかし生徒の実態は、物差しをたくさん与えられすぎると混乱してゴールにたどり着けないことを懸念している意見である。

- ・学校の題材として取り上げる場合は、やはり衣服の機能と状況に合わせた着装の仕方を中心に考え、服に対するその子なりの価値観や、服による自己表現の仕方などを学べるようにしたい。しかし、誤った着方をしていたのでは社会的に問題である。従って、ある程度知っておかなければならない決まりごとや着装のポイントを学んだ後で、自分だったらどんな工夫ができるか、それはどういったことにより影響を与えるかなどを考えさせてみたい。
- ・中学校でこの題材を取り上げる場合には、まず「身体的快適さ」について学ばせてから「心理的快適さ」を学ばせたい。実際に教育実習の時に取り組んだのが「快適な着装」についてだったが、指導案もこの順番で作成した。「身体的快適さ」は、保温性を題材とし、重ね着の効果から空気的重要性を理解させたが布地の特徴をもう少し追及するべきだったと思う。難しいと感じたのは「心理的快適さ」で、TPOに合わせて衣服を選択すると言っても実際の中学生は出かける場所も持っている服も限りがあるので、どうもピンとくるもののように思われなかった。さらに、個性を衣服で表現することについてはもっと難しく感じられた。しかし、ファッション性が先立つと「身体的快適さ」が無視されがちなように思われる。
- ・現代社会の中で社会現象として扱われる若い人のファッションは、目まぐるしく変化し、時には厚

底靴のような危険なものまで流行する。TVや雑誌にあおられてみんなもやっているからという理由で自分も同じような服装をすることは余りよくないことだと思う。授業では、本来持っている被服の機能について見直したり、心理的な満足のみを追い求めることで身体的にはどのような影響があるのかを考える場にすべきだと考える。そのためには基礎的な知識が必要であり、服の構造や繊維の知識について、自分たちの身近な服から話を進めていくとよいと思う。

- ・「身体的快適さ」と「心理的快適さ」というのは密接に関わっている。ただ、どちらかが少しだけ優先されているかどうかではないか。学校でこの題材を取り上げる場合、私は正しい優先の仕方を自分で判断できる力を持てるような学習を進めていきたい。社会には礼儀があるので、いくら自分が嫌だ、不快だと感じて逆らえない服装というものがあったり、衛生上適した着方が重要なことや、自分のからだの健康状態と相談して適した服装ができる力を持てるようになってほしいと思う。

これらは、個人的な価値観の部分に入る前に、みんなに共通するポイントをしっかり抑えておくべきだとする意見である。その例として、服装に関する社会的なルール（いわゆる常識とも言える部分）や繊維や布の性質といった「身体的快適さ」に関わる知識を挙げており、自己表現や個性はあくまでその次の段階ととらえている。特に3つめの意見は、学校では身体的快適さを中心に学習しているのに対し、TVや雑誌で目にするのは流行ファッションについてばかりで、ギャップが大きいことを指摘しており、両者をどう関連づけるかを学校で取り扱う必要があると述べている。さらに最後の意見は、同じく両者の関わりの重要さを指摘しながら、正しい判断ができる力を育てることを目標にするべきだと述べている。いずれも、まわりの環境や取り巻く多くの情報を受け入れたうえで、最後は自分自身で考えて決定することが大切であり、それに耐える能力を養うことが必要だと考えている。

- ・中学校、高校の多くは制服がある。集団的な意識を高める上ではいいのかもしれないが、身体的快

適さを欠くことが多かったような感じがした。夏の暑いときでもきちんとネクタイをしめなければならないことや、冬の寒いときにセーラー服だとなかなか対策がとりにくいなど、制服は毎日の洋服選びの手間からは逃げることはできるけれど、反対に自由に調節することは難しい。こんな日常生活を送っている生徒たちに快適な着装についての授業を行うことは難しいと思う。取り扱ったとしてもなかなか実行されにくいのではないかと思った。

- ・快適な着装について教えるならば、小学校では「身体的快適さ」を教え、中、高校では「心理的快適さ」を教えるとよい。中学に入ると制服であり、みんな同じでつまらないと思う生徒も出てくると思うし、制服だけだと衣服の組み合わせ方についてあまり考える時間はないと思うので、どんな場合にどんな服を着ればよいか考えさせるといだろう。

この2つは、制服に関連した意見である。1つめは3.4でも述べたように、着装教育を行う上で制服の存在が少なからずネックになるとしている。さらに身体的にも快適な衣服ではなかったと指摘しており、この学生にとって制服はあまりいい印象がないことが読み取れる。2つめは同じように制服にあまりいい印象を持っていないが、制服主体の生活でかならずしも満足な衣生活を送っておらず、それについて考える機会もない生徒たちだからこそ、いろいろな衣服について学習させる意味があると考えている。この2つは、同じ状況にあっても、教師がどこに視点をおくかで授業展開の可能性が全く異なることを示しており、大変興味深い。

- ・学校で個性や価値観の育成を主とした授業をした場合、教師から評価しにくいという難点があるかもしれない。

最後の意見は評価に関する指摘である。教材として取り上げる以上、評価は必ずついて回る。答えが一人一人異なり、個々の内面の価値観に関わることについて、何を評価基準とするかは非常に難しく、悩む部分である。

以上、質問2に関わる意見を挙げたが、ほぼ全員

が、「個性を生かす着用」とは言っても「身体的快適さ」抜きには成り立たないことを指摘していた。中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－技術・家庭編－によると、「小学校家庭科で学習した保健衛生上の着方と生活活動上の着方を踏まえて、衣服の社会生活上の機能を中心に取り上げ、時・場所・場合に応じた衣服の着用や、個性を生かす着用の工夫ができるようにする。」とある。着方についての基本的知識を身につけた上での個性であり、これを無視して似合う衣服や好きな衣服が独り歩きすることは適切でないということであろう。

3.6 指導の考え方

ここでは、学生たちが指摘してきた肯定的な意見や否定的な意見をふまえながら、実際に授業に取り組むにあたっての筆者の考えを述べる。

はじめに基本的に押さえておきたいことは、学生のアンケートにも示されているように、「難しいと思うが」「実生活に生かせない可能性もあるが」「制約はあると思うが」と指摘しながらも、「やるべきだ」「やったら楽しいと思う」「自分も学んでみたい（みたかった）」と考えていることであり、筆者もこの意見に賛成である。

一方で、小、中、高等学校を通じてこれまで学習してきた被服の内容について聞いたところ（質問2）、多く記述されていたのは、被服製作実習についてであった。長い時間をかけていろいろなものを製作した記憶は、多くの学生の心に印象として残っていた。その他の部分に関する記述はほとんどなく、あまり覚えていない、思い出せないなど、全体的に印象は薄かった。しかし、衣服を着ることは誰もが毎日経験していることで、その際何を着るかは最も身近な毎日の課題である。また、冬の寒いときに暖かい格好をして寒さが和らいだ時や、自分が気に入った衣服を着用した時に快適な気分になるのは、誰もが一度は経験していることだと思う。このように、本来衣服を着ることは楽しいことであり、人によっては何を着るか迷う段階を含めて楽しさを感じている場合もある。これはおいしい物を食べたときにいい気分になり、また食べてみたいと思うことに類似した感覚、感情と言えるのではないか。このように、着方を指導することで、最終的に児童生徒が「着ることは楽しい」という感覚を持つことがで

きれば大変望ましいと考える。もちろん、学生の指摘にもあるように、基本となる知識（被服材料の特徴、快適な衣服内気候の形成条件など）や社会生活の場でのルール（その場にふさわしい服装など）と関連づけることを忘れてはならず、それを踏まえたうえで衣服を選択させることは言うまでもない。

「個人的なことは学校の授業になじまない」という否定的意見もあったが、これは、調査した大学生が過去に受けてきた授業の経験からでたことであろう。授業時間ごとに設定される主題には、あらかじめ教師が決めた回答があり、そこにたどり着くことを目的として展開されることが多い。その回答はたいてい一つであり、その方が教師としても取り組みやすい。しかし、「個性を生かした着用」に関しては回答が無数にある。これが一斉授業になじまないと指摘される部分であるが、たとえば、美術で絵を描く、国語で作文を書くといった授業を考えてみよう。絵や作文は、個人の内面にある感情や意識の表現手段で、その作品は一人ひとり異なる。自分自身と対話しながら、その内容を絵や文章に表現していくことを考えると、自分の好きな色、服装、似合いそうな格好を考えながら、それを衣服の着用という手段で表現することと似ているのではないか。その後絵の観賞会や作文発表を行って他の生徒に披露し、感想を言い合うことも普通に行われており、自分の着装をみんなに見てもらって意見を聞くことと同じである。「十人十色で個人差の大きい」ことを学校ではすでに他の分野で行っているのである。そういった視点に立てば、それほど違和感はないと思うがどうであろうか。

これまでの被服分野における着方の授業は、「よい着方－わるい着方」を判断基準として行われてきた部分が多かった。今回の指導要領の改定により、好みや個性により踏み込んだ授業ができるようになり、ますます自由度の高い内容になる。その分、生徒の個性を題材としながらも、教師の考えや価値観が授業に反映されやすくなり、ある意味教師の個性が表れるものとなる。その点を十分認識しながら取り扱う心構えが必要な題材であることを忘れてはならない。

本報では、「個性を生かす着用」の指導に対する大学生や筆者の考えをまとめたが、次段階として、実

際の授業展開案, それに基づいた授業実践とその報告, 分析を行い, 筆者の考えの妥当性を検証する必要があると考えている。

参考文献

1. 文部省：中学校学習指導要領（平成10年12月）
解説－技術・家庭編－, 東京書籍（平成11年9月）
2. 文部省：小学校学習指導要領解説家庭編, 開隆堂出版（平成11年5月）
3. 文部省：中学校指導書技術・家庭編, 開隆堂出版（平成元年7月）
4. 文部省：小学校指導書家庭編, 開隆堂出版（平成元年6月）
5. (社)日本家政学会編：家政学シリーズ13環境としての被服, 朝倉書店（1991）
6. 平成14年度用教科書 中学校技術・家庭 家庭分野, 開隆堂出版（2002）
7. 平成14年度用教科書 中学校新しい技術・家庭 家庭分野, 東京書籍（2002）